

結 語

E.S. モースは縄文時代後半に属する『大森貝塚』出土品について、現在でも通用する極めて完成度の高い実測図を残し、東京大学はその原図を140年にわたって大切に保管してきた。しかしその詳細についてはこれまで紹介されることがなかった。実測原図269枚のうち、軟体動物のみはモース自身が描いたが、それ以外は日本人画家木村静山が作図した。本稿は総合研究博物館によって作成されたデジタルデータをもとに、原図の分析を試みたものである。分析の結果、科学者モースの緻密な視点と、それを具体化する画家静山との関係が浮かび上がってきた。

モースは貝塚の出土遺物では多彩な土器の図化を重視し、1/2縮尺の実測図で示すことを基本とした。そのため静山は実物をcm単位のマス目で捉えると同時に、それを作図するいろいろな方法を試みている。原図には定規やコンパスによる下描き線や多数の針穴など、作業に関する具体的な痕跡が残っていた。特に土器の原図にはきわめて細い針で穴をあけ、そこから定規で基準となる線を引いたものが多い。この基準線の有無によって、(1) まったく線を引かない「なし型」、(2) 垂直の中心線を引く「|型」、(3) 申の区画線を引く「申型」の3つに分けることができる。作業は主に貝塚を代表する大形土器用の(1)から始まり、いろいろな土器に対応した(2)の過程を経て、破片に限定された(3)で終了した。しかし線はなくとも土器の原図には各所に一定間隔で針穴があり、具体的な方法は不明ながらcm単位のマス目を基準に描いていることが明らかとなった。また同じような土器が異なる方法で描かれており、モース不在時に独自に工夫した結果と推定されるが、そのみでは説明がつかない。原図は石版印刷ための下図に過ぎないが、画家静山は基本的にひとつの作品と考えていた。凹線は用紙にマス目や下描き線を残さないための究極の方法であったが、徐々に下図作業に徹するようになって、事前に|や申の基準線を設けるようになったという結論に至った。しかしその場合でも線はきわめて薄く、目立たないように引かれていた。また針の多用は精密な測点を記すためのモースの指示であったとしても、必要以上に線を残さなくなかった画家静山にとっても受け入れ易かったであろう。『大森貝塚』の原図は科学的な記録を目指したモースと、作品として画家のプライドにこだわった静山の画力と努力の結晶といえる。

モースが軟体動物で重視したのは貝塚と現生種の比較である。図示する際、新旧のどちらを左右に置けばより効果的か、二枚貝であれば左殻か右殻のどちらを採るかまで検討している。放射肋の数に差があるものは、その結果が反映されるよう実測する面を変えている。また実測に際しても放射肋や巻貝の螺塔の縫合を、針でひとつひとつmm単位で正確に位置を求めている。しかしそれほどの努力を払っても、思ったほどの効果がないと判断すれば掲載をやめている。

モースと静山がこれほどの努力と工夫を重ねても、その後『大森貝塚』での実測方法は継承されなかった。モースは大学を辞してアメリカに帰国し、貝塚の仕事が本意でなかった静山もその現場から離れたからである。モースの教え子にも考古学を専攻する者はいなかった。やがて当時の最新技術であった写真がとって代わり、他は絵図で事足りりとした時代が長く続くことになる。

モースは実質2年足らずという短い滞在期間、しかも極めて多忙にもかかわらず貝塚の調査を実施し、今日では省みられないような小さな破片の一点一点についてまで鋭い観察を注ぎ、その事実を最大限伝えるための努力を惜しまなかった。そして明治初頭の日本にはその意を受けて、モースが誇りであると賞賛した見事に具体化する人的、技術的蓄積があった。資料はいかに観察され記録されるべきか、そして後世にいかにか伝えるのか、『大森貝塚』の実測原図はその原点を示している。

(謝 辞)

長い間の懸案だった『大森貝塚』の実測原図について、ここによくやくひとつの区切りをつけることができた。なお追求すべき点はあるが、原図を託された者の責任をまがりなりにも果たすことができた安堵感とともに、一抹の寂しさを禁じ得ない。部外者の身勝手な要望に対し最大限の御配慮と辛抱強く対応していただいた、かつての東京大学総合研究資料館赤澤威先生、そして現在の総合研究博物館諏訪元先生をはじめとする皆様の御好意には、ただただ感謝申し上げるばかりである。

先行研究は故佐原真先生にある。貝塚発掘 100 周年を記念した研究誌に、原図に残る実測の痕跡を興奮を伴って記述されていた。それは実際に実測を介して遺物と対峙してきた研究者でなければ生じ得ない感慨である。生前ある懇親会でお会いして、先生の研究を引き継ぐ御許可をいただきたいと申し出た筆者に、「そんなこと気にせんでもええ！」と一喝されたことが折に触れて思い出される。

2017 年は貝塚発掘から 140 周年、2018 年はモース生誕 180 周年、そして 2019 年は『大森貝塚』刊行 140 周年にもあたる。佐原先生と同じく、大森イヤーとも呼べるこの期に刊行できたことの縁を感じざるを得ない。英訳を長子学が担ってくれたことも大きな喜びである。

最後に御指導、御協力をいただいた方々及び関係機関のお名前を掲げ感謝申し上げるとともに、散逸することの多い原図を 140 年にわたって欠けることなく保管されてきた歴代の大学関係者に心からの敬意を表したい。実測がモニター越しの画像処理と化した今日、E.S. モースと木村静山の努力から我々は何を継承し何を変え、そして得たものと引き換えに何を失ったのか、多くの方々がこの原図と対面されることを願って止まない。

故佐原真・赤澤威・諏訪元・佐宗亜衣子・初鹿野博之・秋山忍・野村周平・蒲原政幸・西井幸雄・宮瀧交二・野口和己子・稲葉佳代子・田中学・東京大学総合研究博物館・国立科学博物館研究部・国立国会図書館・名古屋市東山植物園伊藤圭介記念室・読売新聞社史編集室・凸版印刷株式会社印刷史料館・二戸市立二戸歴史民俗資料館・日本工業大学図書館・Phillips Library, Peabody Essex Museum
(順不同・敬称略)